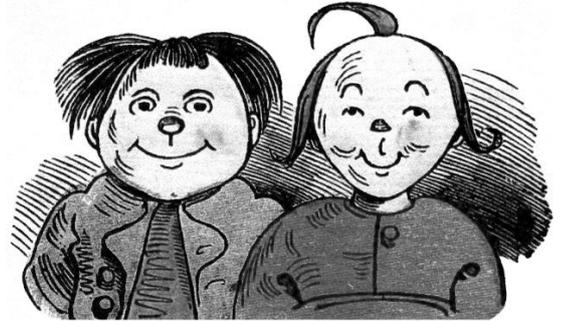


## はじめに

訳 岡部由紀子

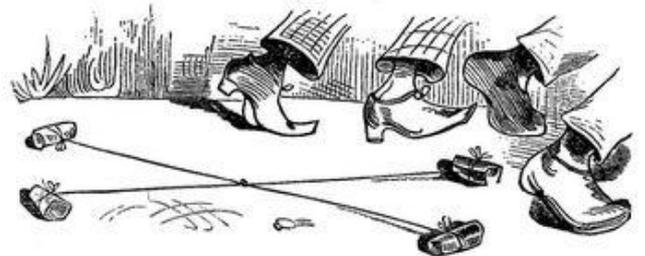
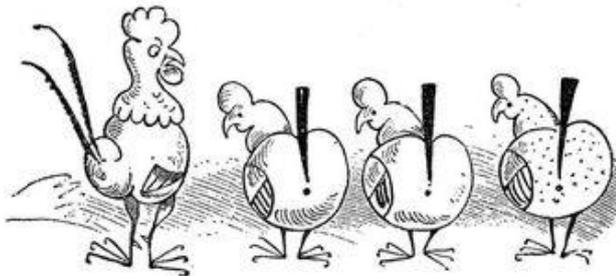
ああ、わるさが得意な子の話 聞いたり読んだりするものだ。  
 たとえば、この二人の子 マックスとモーリッツという名前。  
 かしこい教えに従って よい子になろうなんて思わない。  
 代わりにそれをばかにして 陰でぺろりと舌を出す。  
 わるさをしでかす気になれば たやすくできるものなのさ！  
 人をからかい 生き物いじめ リンゴに梨にプラムを盗む。  
 もちろんそれはおもしろい おまけにずっとらくちんだ  
 教会や学校の椅子の上 じっと座っているよりも。  
 でもね ああなんとかわいそう 二人の最後を知ったなら！  
 それはひどい目にあったんだ マックスとモーリッツ そろってね。  
 だから、二人がしでかしたこと ここに描いて書きとめよう。



## 最初のいたずら

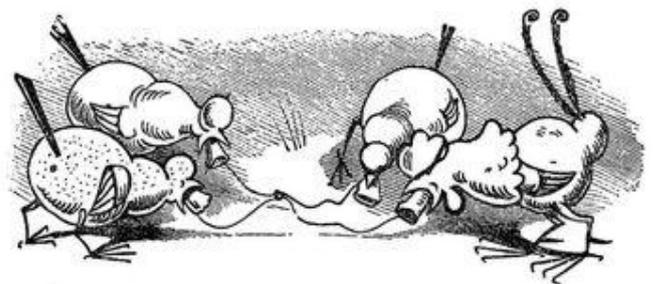
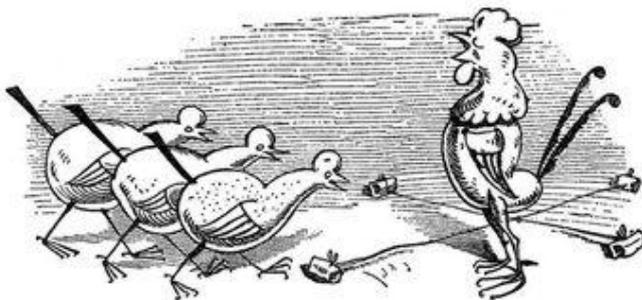
手塩にかけて トリを飼う そんな人は多いもの  
 ひとつ 産みたて卵が目当て  
 ふたつ たまには 焼いて食べるため  
 みつつ 羽も利用せにや 枕や布団につめこんで  
 寒さに凍えて 寝るのはごめん

一人暮らしの  
 ボルテおばさん  
 寒い寝床は  
 やはりいや



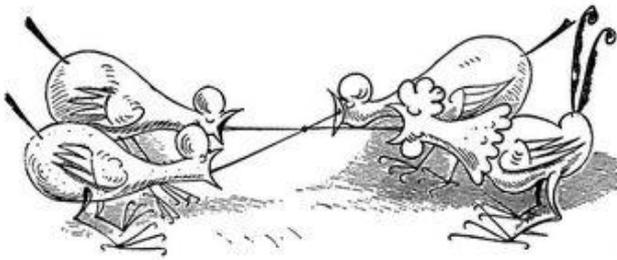
おばさん、めんどり3羽飼っていた 立派なおんどりー羽もね  
 マックスとモーリッツ頭をひねる、どんないたずらしてやろう  
 一、二、三、すばやく パンを切り分けた

小指ぐらいの四個のパン 十字の紐の先っちょに  
 それぞれ結んで できあがり  
 しかけたところは おばさんの庭

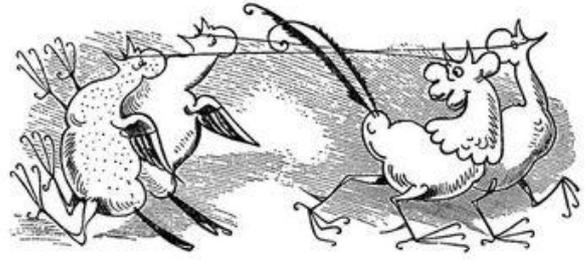


見つけた途端 おんどり叫ぶ コケコッコ、コケコケコッコー  
 タッタッタッ めんどりたちもやってきた

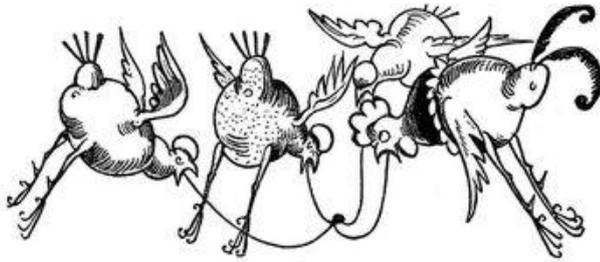
おんどり めんどり それぞれに  
 パンをひとかけ 丸呑み ゴクリ



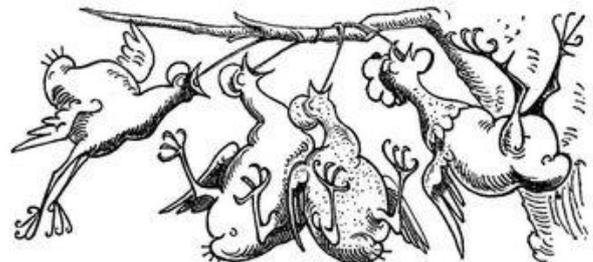
気がつきゃ 誰も逃げられぬ



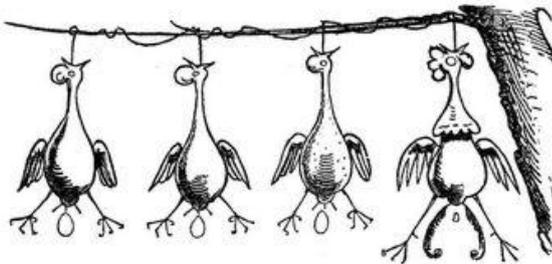
あっちへこっちへ 引っ張りあって



とうとうみんなで 舞い上がる  
あれあれ たまげた 大変だ！



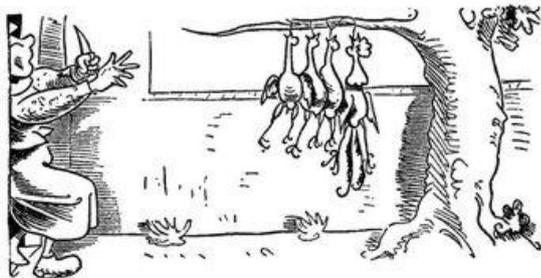
ひっかかったは 長い枯れ枝  
伸びるよ伸びる 鳥の首 あげる悲鳴は 先細り



あわてて産んだよ それぞれ卵を一個ずつ  
やがて迎えた 最後のとき



ベッドの中のボルテおばさん  
耳にしたのは この嘆き声



胸騒ぎにうながされ おばさん外へでてみると  
ああ、なんと むごい有様！



目からは涙 とめどなく 私の希望 私のあこがれ  
生涯の夢 みんな ぶらさがる リングの木



憂いに沈み 心も重く ナイフで紐切り トリおろす  
このままにはしておけぬもの



悲しみのあまり 目もうつろ  
家へと すごすご引き揚げる

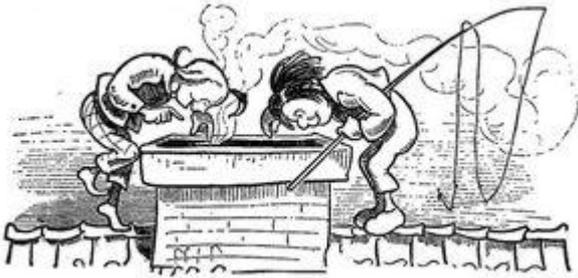
これが 最初のいたずらで 次のいたずら すぐ続く

## 二つめのいたずら

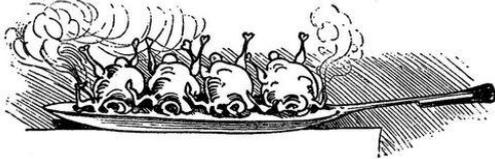
ボルテおばさん 気を取り直し あれやこれやと考えた  
あまりに早く この世を去った鶏たちを  
ひそやかに そして丁重に こんがり焼いて いただく  
それが せめての供養だと  
庭や畑で 元気に砂を掻いていた  
ニワトリたちはああ哀れ 羽むしられて丸裸  
カマドの上に 横たわる



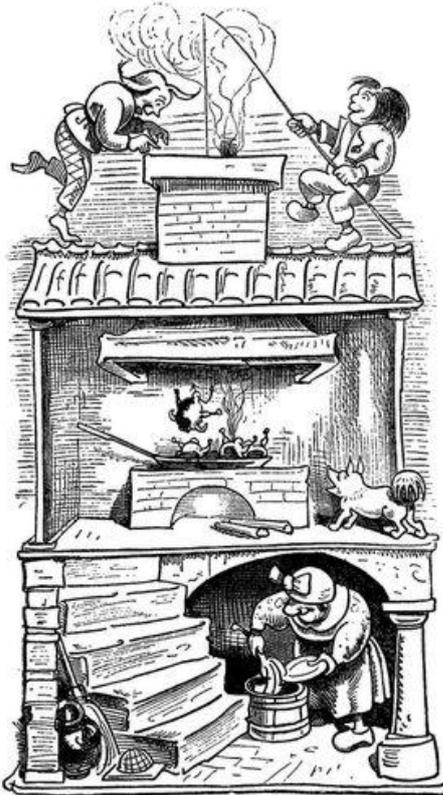
涙も新た ボルテおばさん 脇にたたずむスピッツ一匹  
マックスとモーリッツもう嗅ぎつけて「急げ、屋根の上！」



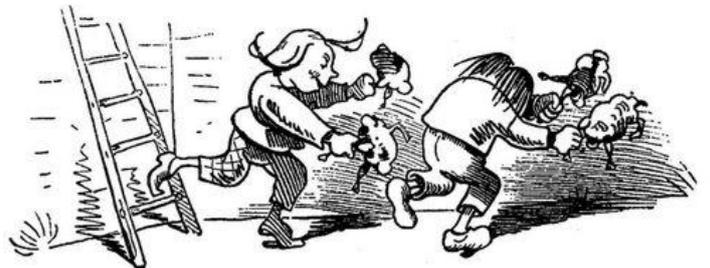
煙突覗き、心は踊る  
頭も首も落とされた ニワトリ並んで ジュージューと



皿を手にしたボルテおばさん ちょうど地下へと降りていく  
樽付けキャベツ ひとすくい  
大好物のつけあわせ  
暖めて食べる ザウアークラウト

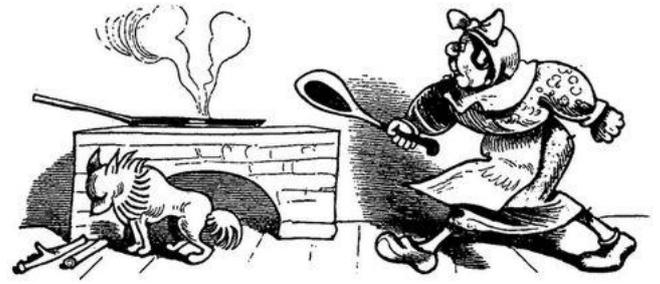


屋根に陣取る わるがきは、鬼の居ぬ間の洗濯だ  
用意周到 マックス持参の釣り竿一本  
ピューン ニワトリ一羽 釣りあげた  
ピューン ニ羽めも やってきた  
ピューン 三羽め  
四羽め くるぞ  
ピューン お前も いただきだ  
スピッツだけが 目撃者 ワンワン吠えて 知らせたが  
わるがき共はずばしこく 屋根から降りて逃げてった  
さあ これからが 見ものだぞ

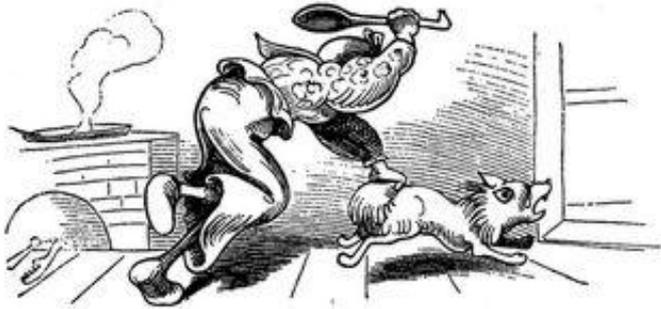




ボルテおばさん やって来た  
 空っぽの鍋 目に入り 茫然自失 立ちつくす  
 ニワトリみんな 消えている  
 「スピッツめ！」 まず口からでた言葉



「お前、スピッツ できそこない！  
 おまち、思い知らせてやる！」



ごつくて重い 大しゃもじ スピッツめがけて 振り下ろす  
 響き渡るは 犬の悲鳴 ぬれぎぬだ一と、言うような



垣根の中の隠れ家で マックスとモーリッツは たかいびき  
 ご馳走みんな 腹の中 口からはみ出る 鶏のもも

これが 二つめのいたずらで 次のいたずら すぐ続く

### 三つめのいたずら



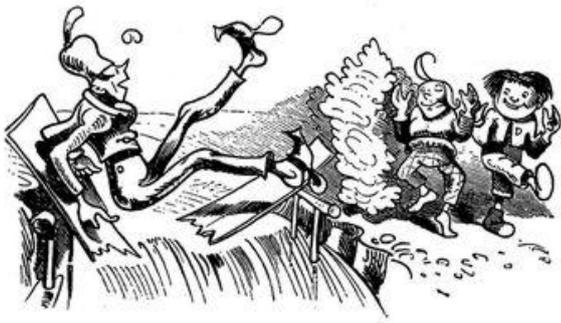
村に住んでる者ならば、誰でも知ってるベックさん。  
 普段着 よそ行き 長ズボン ピンととがった燕尾服 ポケットつきのチョッキから  
 あったかコートにゲートルまで 何でもござれ 仕立屋ベック。  
 繕い物 丈つめ つぎあて ボタン付け 前でも後ろでも同じこと、  
 どこがどんなに破れても 仕立屋ベックの手にかかりや どんな服でもよみがえる。  
 それが ベックの生きがいだ。だから 村の誰とも仲良しさ。  
 おもしろくないのは マックスとモーリッツ なんとか一泡ふかせたい。



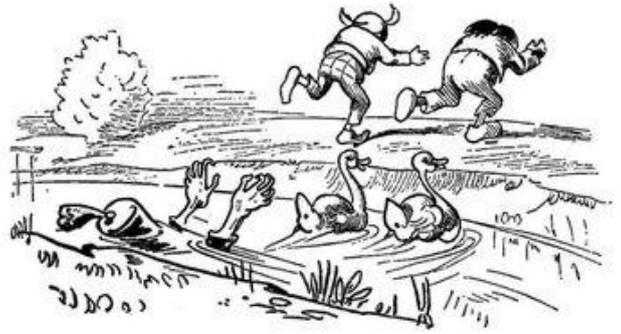
こっそり橋に ノコ入れる キーコーギーコ



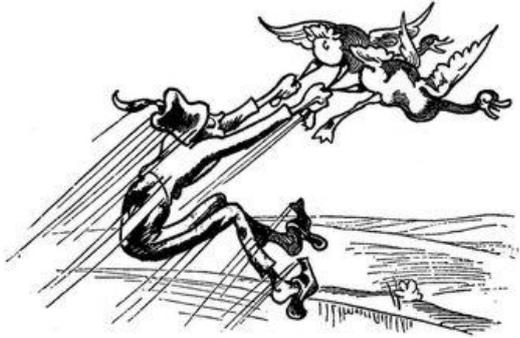
出てこい 出てこい 雄のヤギ 仕立屋 仕立屋 メエメエエ



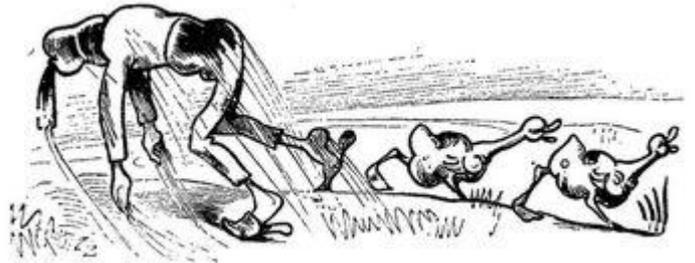
バリン 橋はまっぶたつ 仕立屋 ザンプ 水の中



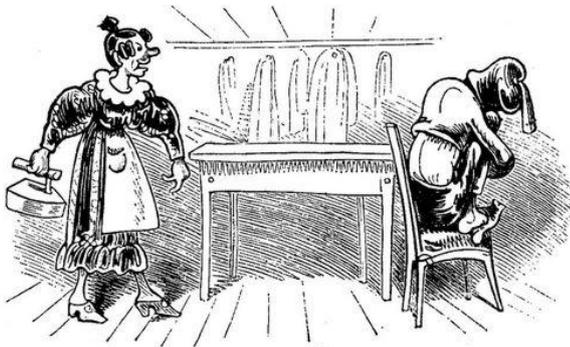
藁にもすがる思いでベック すがりついたは 2羽の鳥



両手にガチョウをしっかりと掴み 岸へとバタバタバタ



助かったというものの やれやれ とんだ目にあつた



ここで登場 おかみさん なんとあつぱれ  
熱く熱したアイロンを 冷えた体に押し当てた



これが効いたか 仕立屋ベック  
「ベックが元気になったとき」 やがて 村に知れわたる

これが 三つめのいたずらで 次のいたずら すぐ続く

## 四つめのいたずら



人間は学ぶことが大切だ そんなことは知れたこと。

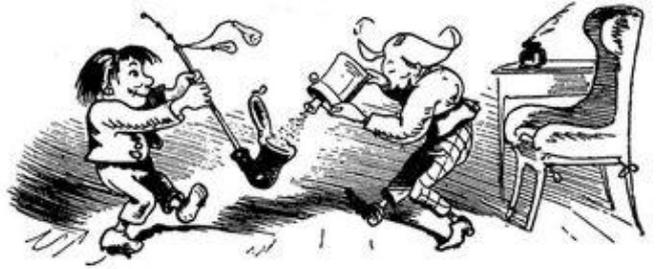
たとえイロハができたとして 読み書き算盤上手でも 賢いなどとはいえぬもの。

尊い教えに耳傾ける それが肝要ということだ。ここにいるのはレムペル先生、そのこと  
しっかり わきまえている。マックス、モーリッツにしてみれば、そんな先生 気に入くわ  
ない。いたずら好きの輩には 敬う気なんてさらさらない。

ところで立派なレムペル先生、大のタバコの信奉者。骨のおれる仕事を終えて この善  
良な老人が一服するのはしごく当然。マックス、モーリッツの二人組 性懲りもなく 次の  
いたずら思いつく。そうだ、パイプを利用して この老人をへこませよう。



謹厳実直 レムペル先生 気持ちをこめて オルガン演奏



忍び込んだは先生の家 パイプに押し込む 火薬の粉末



お勤め終えた先生は 教会鍵かけ そそくさ家へ



やれやれ一服「ああ、これぞ至福の時じゃ！」



ドカーン 轟音立ててパイプが爆発 なにもかもが吹っ飛んだ



よかった 先生、生きている でもちょっと様子が変



鼻、手、顔、それに耳まで真っ黒け モーア人にそっくりだ 残り少ない髪の毛も 根元まですっかり 燃えちゃった

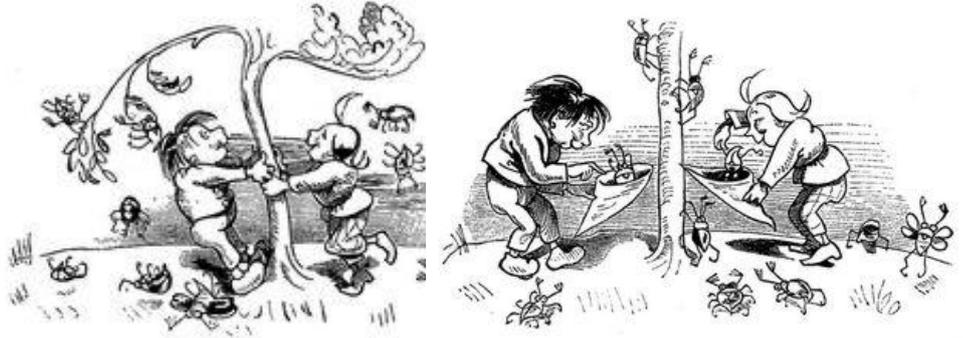


時はすべてを癒してくれる 先生とても同じこと 割りを食ったよ こわれたパイプ これは元には戻らない

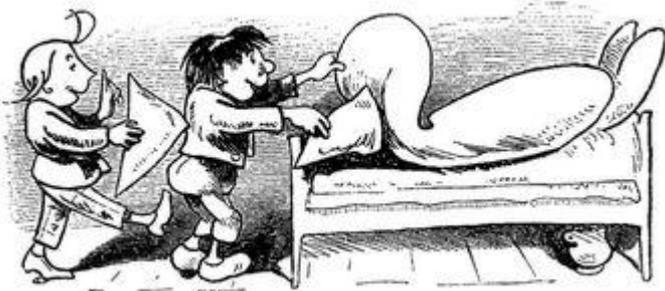
これが 四つめのいたずらで 次のいたずら すぐ続く

# 五つめのいたずら

礼儀正しく 控えめに おじさんが  
 喜ぶことに気を配る  
 これが子供の心得だ。  
 ところが マックスにモーリッツ  
 そんなことには お構いなし。  
 ごらん フリッツおじさんに  
 どんないたずら しかけたか。



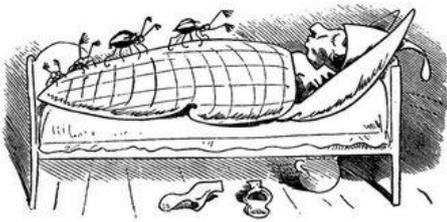
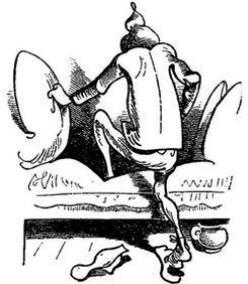
マックスとモーリッツ 元気いっぱい 木をゆする 落ちてくるのはコガネムシ すばやくつかまえ 紙の袋に詰め込んだ



持っていったよ おじさんの ベッドの布団の隅っこへ



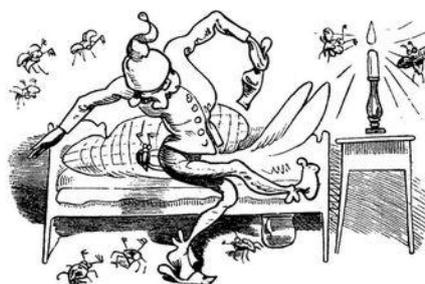
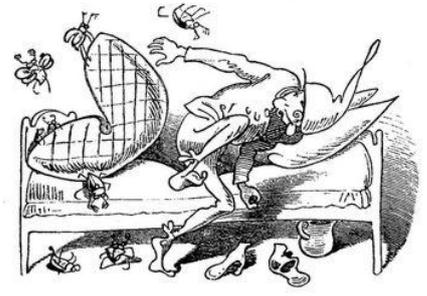
三角帽子をかぶったおじさん やがて寝床にやってきた



ガサガサ、ゴソゴソ コガネムシ



「ひえー、なんだー」 掴んだ虫にぞっとして おじさんベッドを飛び出した



「いたっ！」首にも一匹 ブンブン音立て飛び回る奴 這い回るやつ 緊急事態だ 叩いて踏みつけ 皆やつつけた



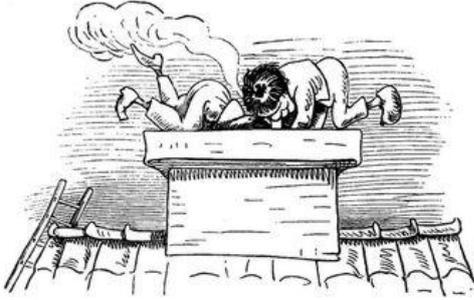
ほら見てごらん やっと終了 この騒動



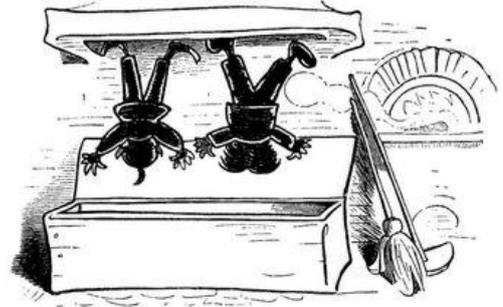
フリッツおじさん ホットして また眠りについたとき

## 六つめのいたずら

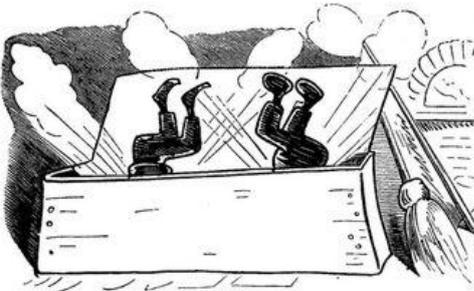
心うきうき イースターはもうすぐだ  
信心深いパン職人 どっさりこさえる 甘い菓子  
そのおこぼれを ねらってる  
マックスとモーリッツの 二人組  
どっこい 用心深いパン屋さん  
パン焼き小屋に 鍵ガチャリ



それでも 忍び込むならば  
煙突ぐぐって いくしかない



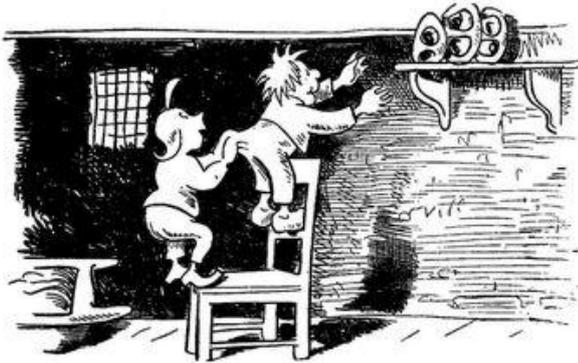
バリバリン! 煙突抜けて やってきた  
二人の子供 からすのように 真っ黒け



バフーン! 落ちた所は 粉のつまった 箱の中



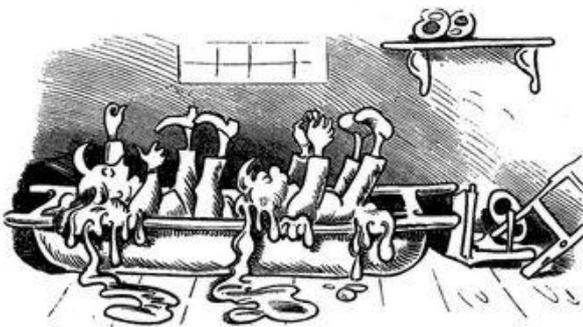
ほらみてごらん! 二人とも チョークのように 真っ白け



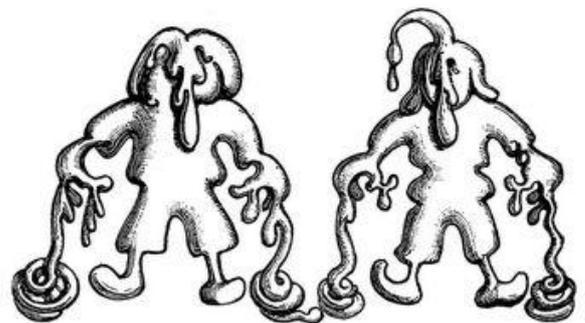
シメシメ あったぞ みつけたぞ 棚に並んだ プレッツェル



ポキッ! 椅子がふたつに 割れちゃった



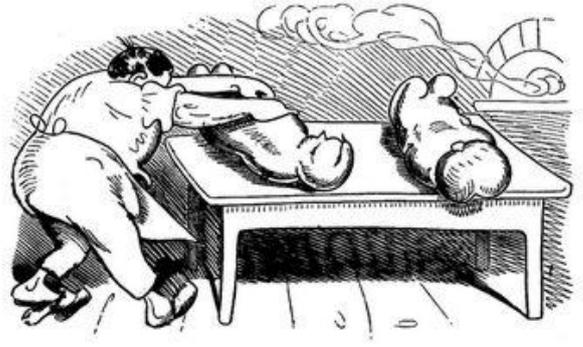
ポシャーン! どろどろの中に どっぷりつか



パンの生地にくるまれて、なんとみじめな 立ち姿



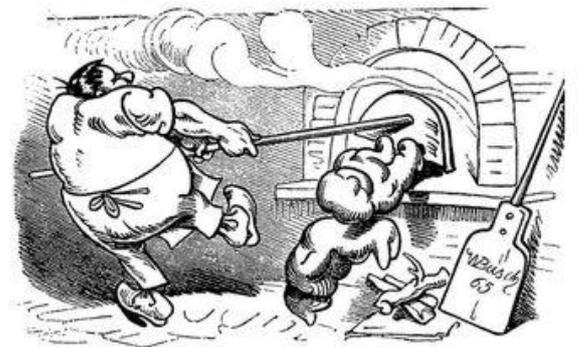
そこへ登場 パン屋さん、甘党二人 みつけたぞ



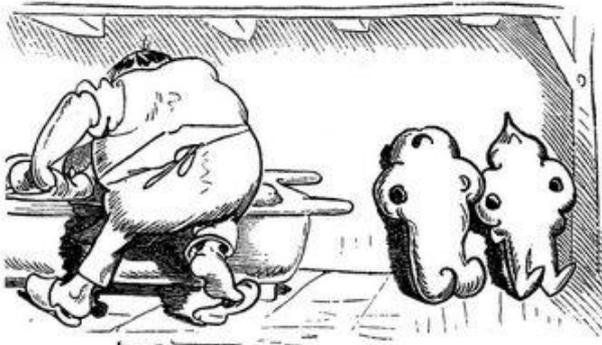
いちにいさん あっという間に パン ニ丁上がり!



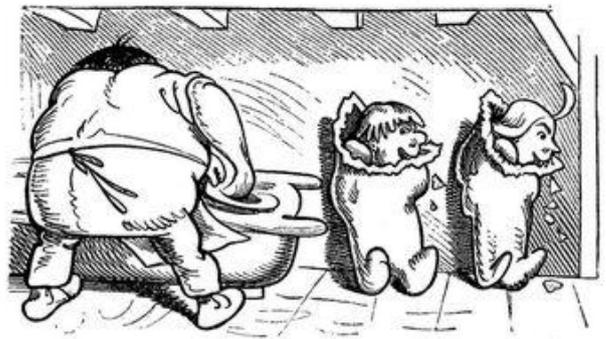
パン焼き窯は まだ熱い  
よいしょ! 押し込め 窯の中



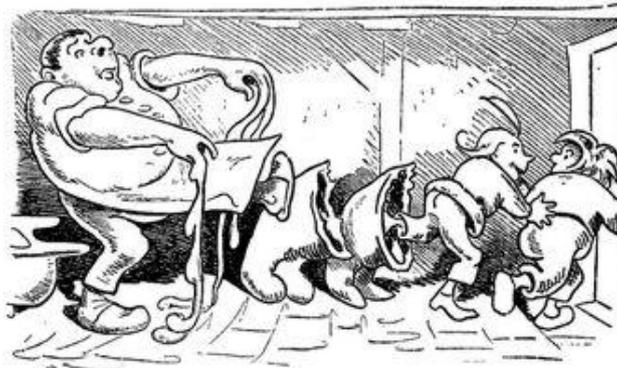
よいしょ! 掻きだせ ほてる窯から  
こんがり じょうずに 焼けてるぞ!



ふたりは おだぶつ! と、誰もが思う  
ところが どっこい 生きていた



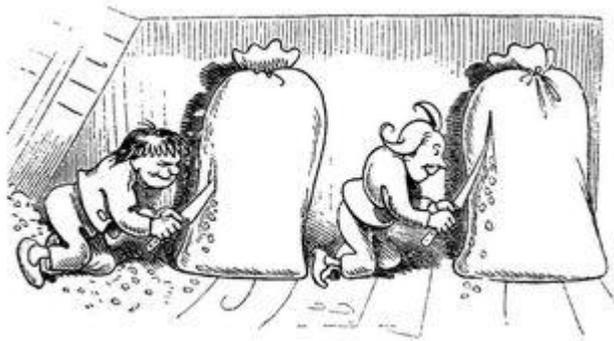
ポリポリ、カリカリ! ネズミよろしく  
殻食い破り 再登場



パン屋の親方 気づいて叫ぶ 「ありゃー、やつらが 逃げていく!」

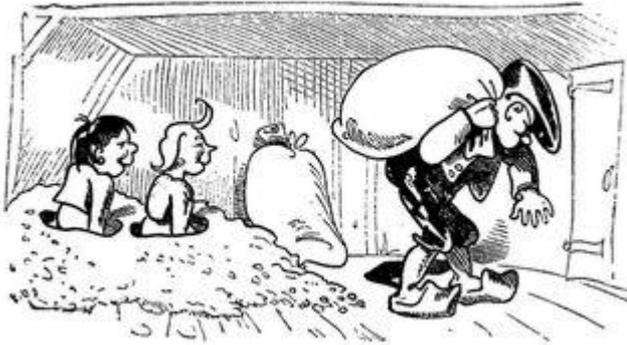
これが 六つめのいたずらで 次のいたずら すぐ続く

# さいごのいたずら

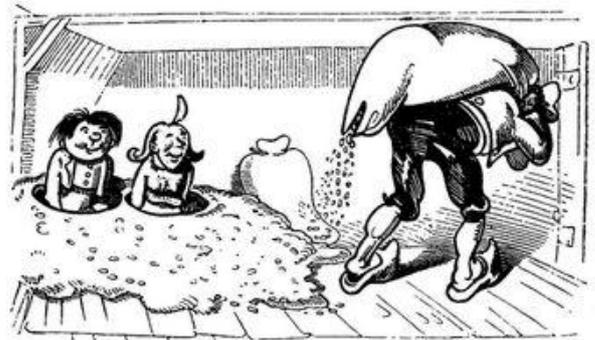


マックス、モーリッツ 覚悟しろ  
いよいよ 年貢の納めどき

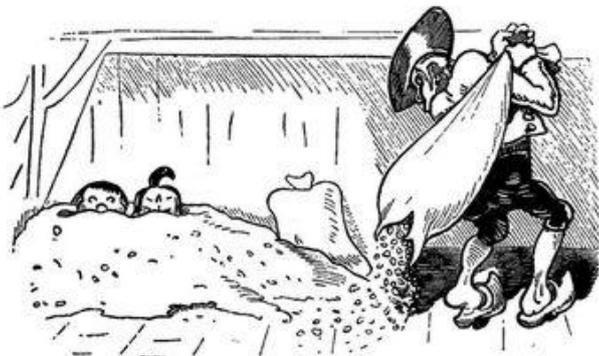
いったい なんで この二人  
麦の袋に 穴開けるのか



ごらん お百姓のメッケさん  
袋をひとつ 背負ったぞ



歩き出した そのとたん  
麦がポロポロ こぼれだす



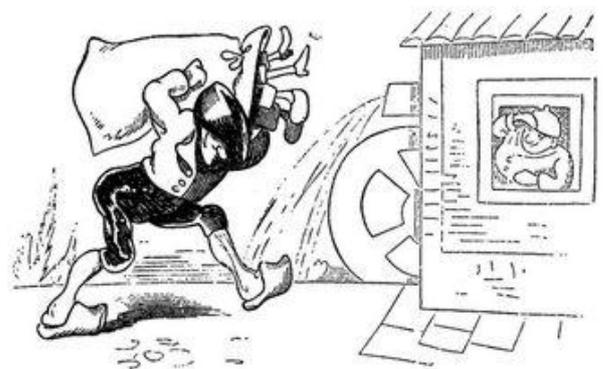
なにか変だと、立ち止まり  
「あんりやまあ！ だんだん 減っていくぞ こりゃ！」



やい！ 見つけたぞ 見つけたぞ  
麦に隠れる いたずら小僧



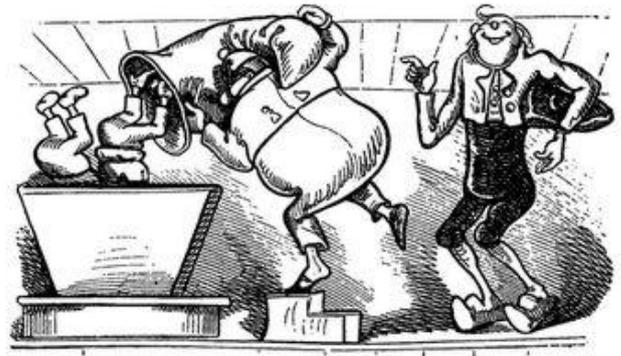
ほいっ！ 悪がきどもを シャベルですくい  
押し込む先は 大袋



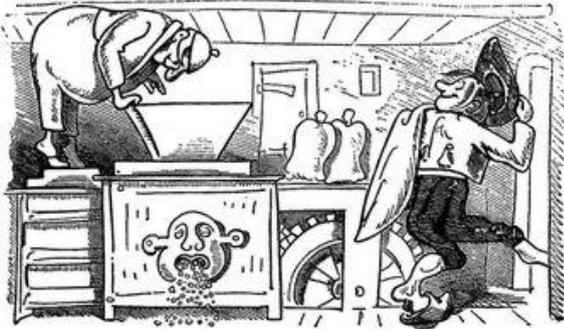
マックス、モーリッツ 不安がつのる  
向かっているのは 水車小屋



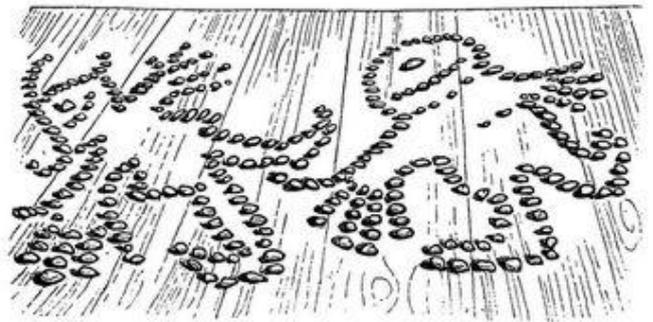
「粉やの親方 これ見ておくれ  
すぐさま 粉に ひいてくだされ」



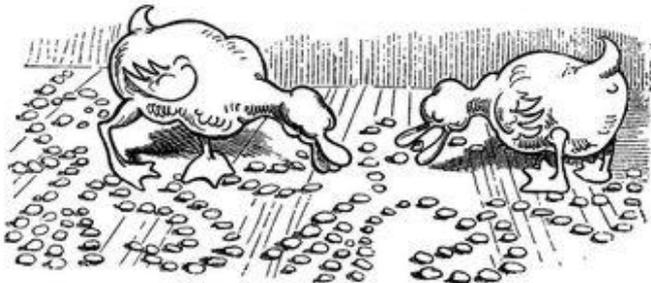
「よいこらしょ！」 悪ガキどもを 振り落とす  
粉ひき器械の じょうごの中へ



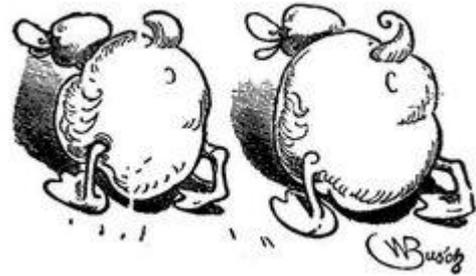
ガリゴリ、ガリゴリ、音立てて  
仕事に精出す 粉ひき器



細かく碎かれ 挽き割り麦に  
でもね まだ残ってる ふたりの姿



やってきたのは 粉やのアヒル あっという間に みな平らげた



## 終わりに

この顛末を耳にして、悲しむ者など いなかった。  
ボルテおばさん やさしい声で「ごらんなさい、こうなることと思ったわ」  
仕立屋ベック「そうそうそう、悪さをするため 生きてるなんて！」  
つづいて レムペル先生「これもまた、ひとつの教訓じゃ！」  
「そのとおり」と、パン屋さん「甘いもの 好きにもほどがあるってものよ！」  
お人好しのフリッツおじさん「悪い冗談 なれの果ては こんなもの！」  
律義者のお百姓「おれの知ったことじゃねえ！」  
つまり 村のあちこちで 嬉しげな台詞が 飛び交ったのさ  
「ありがたや、やっといたずらと おさらばできる！」

出典 Wilhelm Busch „Max und Moritz“ 1865 München <http://www.zeno.org/Literatur>

翻訳 岡部由紀子 (3、4、5 のいたずらは、絵も文も抜粋した簡略版です)